

琉球大学学術リポジトリ

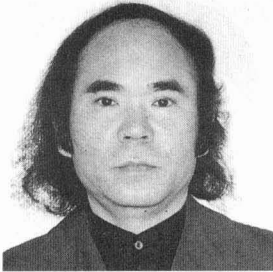
チュルリョーニスとの出会い

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄フィルハーモニック協会 公開日: 2009-10-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松原, 敏夫, Matsubara, Toshio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/12787

チュルリョーニスとの出会い

松原 敏夫

しじまにもカオスの香り納め有り 未だ聴かぬ淵の奥にはリトアニア チュルリョーニス流る祖国に風を聴く



松原 敏夫

交響詩「森の中で」は、リトアニアを離れてポーランドのワルシャワ芸術院に留学しているときに着想され、チュルリョーニスが25歳頃の作品である、といわれている。これは、幼年のころに、父がよく話して聞かしたりリトアニアの民話や伝説の記憶が題材になっているのであろうか。祖国の歴史と風土を楽想にもつ交響詩で、チュルリョーニスは何をイメージしたのであろうか。

この曲は、はじめリトアニアの緑の草原を吹く風のように静かに響いてくる。弦と管の和音が、風になって周囲を呼び込むような、情景をなでるような、優しいメロディを奏でる。感情と自然の調和から出てくる情念の表現であろうか。樹木のざわめき、民話の飛び交うノスタルジー、叙情詩的韻律、ときに嵐の音…。祖国リトアニアに思いを寄せながら、リトアニアの自然の情景やそこに流れる時間と空間が交わって生まれる音。そして、最後に、楽器が一斉に蜂起するように高らかに鳴り響き、余韻を引きながら終わる。高らかに終わるのは、おそらく、「おお、我らがリトアニアよ！」という感情が高まったときの賛歌であろう。16分ほどの曲だが、聴いていながら、イメージ的な、印象派風な、情感が満ちあふれた作風だと思った。

ところで、この沖縄市民コンサートで、リトアニアの交響楽団を呼ぶと聞いていたが、演奏される曲目のなかに、「チュルリョーニス」というあまり聴いたことのない作曲家が入っていることから、最近、新しい音に飢えている小生の好奇心を刺激したのであった。

その時から、私は、折りあるごとに、音楽教養のあるひとに、チュルリョーニスという作曲家を知っているか？と尋ねた。しかし、「誰れ、それ？」と応えるのが殆どであった。私の脳裏に、知らないのはこちらだけではないな、という安堵感と優越感があったのはいうまでもない。あまり知られていない作曲家らしいのだ。マスメディアに登場するとか、教科書に載るかして全人教育しなければ「人口に膾炙されない」、この世の習わしの蔭に隠れて、埋もれている芸術家が非常に多い。

リトアニアともなると、かつてソ連の一員であったために、クレムリンの検閲を通してしか入ってこなかった文化情報が、1991年の独立を経て、ようやくにして、国として、自由に日本でも紹介されるようになった。この交響詩「森の中で」が日本で初演されたのが、1995年というから、リトアニアの音楽紹介が、いかに遅れていたかがわかる。チュルリョーニスは、教会のオルガン奏者を父に持つ、リトアニアを代表する作曲家であり、36歳の短い生涯（1875-1911）で、最後は精神に異常をきたして亡くなった、画家としての才能もあった、楽曲200点以上、絵画300点以上を残したが、しかし、その評価は死後30年経ってからであったということ等がわかった。1992年に西部美術館で、彼の絵画を集めた「チュルリョーニス展」が開かれたという。絵の一部は、インターネットで外国のサイトを通して画像を見ることができる。これもなかなか面白い絵ばかりである。「Creation of the World」で、Vytautas Landsbergis（元リトアニア首相）はオリジナルな作風であることを強調しているが、たしかにそうだ。私は、新鮮な驚きを受けたといっておこう。ストラビンスキーは、チュルリョーニスの絵のコレクションを持っている、とロマン・ロランに自慢していたらしい。どちらかという、チュルリョーニスは画家として名をはせている趣がある。

つまり、チュルリョーニスは、リトアニアでは、英雄扱いされるほど有名な芸術家であるようで、彼の名前の入った芸術学校があるというし、リトアニア第2の都市カウナス市には、美術館があって、チュルリョーニスの特別ギャラリーもあるという。その国で、よく知られている芸術家が、外国で無名であることは、文化情報の流通にもよると思われる。アメリカの微細の情報が、ふんだんに入ってくる時代なのに、まだまだ未知の状態にある外国が多い。しかし、いまやインターネットの時代である。専門家が独占的に紹介するのを待ってはいじれたい。通信手段があれば、自ら情報を探れることが可能なので、自力で外国の情報を得たほうがいい。

私たちは、「四季」「田園」「ロマンティック」…といった自然をモチーフにした交響曲を知っているが、交響詩「森の中で」には、チュルリョーニスの血の中に流れる受難の歴史を持つリトアニア人魂が、脈打っている。ほかに交響詩「海」やピアノ曲がCDで出ているので、いつか聴いてみたいと思っているところである。

私は、この演奏会でなければ出会わなかったであろう作曲家の音が聴ける幸運を享受しようと思う。